PhD合格へ繋げた米国MSPHグローバルヘルス留学

Johns Hopkins Center for Global Digital Health Innovations /
University of North Carolina Chapel Hill, Gillings Scholl of Global Public Health

Arisa Shichijo Kiyomoto

京都大学法学部および一橋大学公共経済修士を卒業後、米国Johns Hopkins大学へ留学。2023年5月にMSPHを卒業し、同年8月よりUNC Chapel Hill校PhD課程へ進学予定。【Twitter: @aris_aaa_n】

私にとって米国 Master of Science in Public Health (MSPH) 留学の目標は、グローバルヘルス PhD 課程への進学意思を再確認し、合格を掴み取ることでした。ご支援に恵まれ、UNC Chapel Hill 校での PhD 進学が決まり、本稿の機会をいただきました。進学を検討している方はもちろん、広く「明確な目標を持った上での留学の魅力」について私の経験からお伝えしたいと願い、筆を執りました。

Johns Hopkins 大学の 2 年制修士、MSPH を選ぶ

私のグローバルヘルス研究関心は、デジタルデータ等の新たな情報源を活用して Monitoring & Evaluation(M&E) 手法を向上させ、中低所得国の医療制度の強化に資することです。M&E は実際の政策やプログラムを分析の対象とすることから、現地の政府や NGO とパートナーシップを結び、協力することが重要です。よって、留学先はグローバルヘルスプロジェクトの数の多さに定評がある Johns Hopkins 大学での、腰を据えてプロジェクトに取り組める 2 年制の MSPH を選びました。

Department of International Health の MSPH は、1) Global Disease Epidemiology & Control, 2) Health System, 3)Social & Behavioral Interventions, 4)Human Nutrition の 4 トラックに分かれており、入学後にはトラックの垣根を越えてメンターと出会える学際性の高さが魅力です。私の MSPH 留学中には 4 つのプロジェクトへの参画が叶いました。下記でそのうち 2 つをご紹介します。

ウガンダ農村部で州政府と協力した Community RCT に取り組む

医療資源が限られた地域では、Community Health Workers(CHW) が母子保健アウトカム等の向上に重要な役割を担っていますが、多くの国で CHW はボランティアとして働いており、制度の持続可能性に課題があります。そこで私たちは、ウガンダ Makerere 大学・州政府と協力して、CHW のインセンティブ設計に関する Community RCT を行っています 。私は夏休みを使ってウガンダに渡航し、現地チームと共に介入、データ収集・分析に携わりました。コミュニティは研究のために設計されたものではないため、地域の行事と調整して進める必要があり、ランダム化の単位となる村の数や境界線の変化など、多くの不確実性を乗り越えねばなりません。そのようなプロジェクトマネジメントをパートナー三者で協力して進める経験からグローバルヘルス研究でのパートナーシップの価値に触れ、良いコラボレーションを生み出せる研究者になりたいという想いが強まりました。

ブルキナファソで「デジタルツールは現場の負担を減らしたか」を問う

多くの中低所得国では、デジタルヘルスイノベーションはケアの質を上げるための機会として注目が高まっており、ブルキナファソでも国家規模のデジタルプロジェクトが進んでいます。しかし、デジタル介入がどう医療制度の強化につながるのかを実証した研究は少なく、より包括的な M&E が求められています 。

そこで、私の修士論文は、デジタルツールの登場による fragmentation (パラレルシステムが乱立し、統合が上手くいっていない) 課題に着目し、複数システムのデータの整合性やレポーティングの迅速性をツール導入前後で比較する分析を行いました。この修士論文及び MSPH 中のプロジェクトを総合して、現場に向き合った着眼点と、複数のデータソースを組み合わせた定量分析アプローチを評価され、Bloomberg Research Scholar of the Year 22-23 を受賞することができました。

PhD 合格に重要なピースを振り返る

MSPH 留学開始から約 15 ヶ月後の冬に PhD 課程の出願締め切りがありました。私の経験から振り返ってグローバルヘルス分野での PhD 進学を叶えるための 3 つのポイントをまとめます。第一に、

❶「ウガンダでのフィールドワーク：District LeadershipとCommunity Health Workersと共に」
❷「Johns Hopkins Bloomberg Research Scholar of the Year 22-23の授賞式」
❸「MSPHの同級生たち：1年目はマスク着用で授業に」

Original Research Vision の強度です。どのようなチームと何をどう問うていきたいのか。なぜそれは Significant で Innovative な切り口なのか。―この問いに向き合うことが大切でした。

MSPH 留学前の私にはほぼすべての国際事業が輝いて見え、優先順位をつける視点が不足していましたが、現在ではよりクリアな判断軸が持てました。第二に、メンターとの強い信頼関係に裏付けられた推薦状を準備できることです。私の分野では 4 枚の推薦状を提出しますが、4 者の視点を通して自分の人格やスキルが魅力的に浮かび上がる必要があります。やはり、プロジェクトでメンターと困難を共にした経験が人としての魅力を伝え、ユニークな推薦状につながったと感じています。第三に、グローバルヘルス研究歴の充実です。研究業績となる論文等に加えて、多様性あるチームで自分もメンバーも成果を出せるような働きをし、現場の不確実性に対応するコンピテンシーをアピールすることが重要だと考えます。また、グローバルヘルス研究には他の分野よりも長い時間がかかります。よって、中間成果の発表、Sub-analysis の立ち上げ、次のグラントの獲得など、プロジェクトクローズ前でも出せる業績をデザインしておくことが大切です。以上の 3 点が 1 つのストーリーとなってトレーニングギャップに結びつくと、出願者の魅力が伝わるのではないでしょうか。

楽しかった MSPH 留学

2 年間の留学は本当に楽しいものでした。成果がでず苦しんだ期間もありましたが、目標があったからこそ、忙しい日々の中でも内省と新しい挑戦を続ける事ができ、結果的に留学がとても充実したのだと思います。末筆になりましたが、私の留学をサポートくださったメンター・友人・家族・奨学金財団など、すべての方に感謝いたします。次の場所は UNC Chapel Hill 校です。Hopkins に次ぐ Public Health 分野 2 位の伝統ある州立大学で、Applied Epidemiology を学び、たくさんのメンター・友人たちと出会い、新たな扉を開くことが楽しみです。